

講演

「精神革命」とその現代的課題

伊東 俊太郎

今日の講演のテーマは「精神革命」とその現代的課題」ということですが、この「精神革命」に括弧がついておりますね。これは私の命名した概念ですので、まず「精神革命」とはどういうものかということをお話し上げ、そしてそれが持っている現代的な意義と課題ないし問題点についてお話ししてみたいと思います。この「精神革命」ということを申し上げるためには、すでにお手元にある資料1にも書いてありますように、私の人類史の五大変革期という文明史の五つの段階のことをお話ししなければならぬと思います。

資料1 伊東俊太郎「精神革命の比較的考察」『モラロジー社会教育資料』一一二号（一九九二年五月）

資料2 伊東俊太郎「人類史における精神革命と現代のコモンモラリティ」『麗澤教育』No.6（二〇〇三年四月）

この五段階というのは、その資料にありますように、まず第一が「人類革命」というものなんです。我々の人類史というものを、世界的な規模で考えた場合、五つの段階を経て現在に到達しているというのが私の考えで、その第一段階が「人類革命」というんです。

これは何かというと、一言でいってしまえば、人類の成立ということなんです。ですから人類史の始まり

として、当然一番最初にこななければいけないわけですが、これが今の最新の研究ですと、六〇〇万〜七〇〇万年位前にアフリカで起こったんです。人類の故郷はアフリカなんです。人類はアフリカで成立し、そこから出発して地球中に拡まっていったわけなんです。

ここで人類が形成されると、次に起こる大きな変革が「農業革命」というものであります。これは、それまで木の実を採ったり、動物を狩ったり、魚を釣ったり、そして在るものを集めて狩猟採集や漁撈で日々の生活をしてきた人類が、はじめて食料を作り出したわけです。これも大きな変革期です。

つまり農耕と牧畜の発見なんです。ここでそういう食べものの生産と確保という営みに人類は入るわけでありまして、これが大体今から一万年、あるいは一万二〇〇〇年位前までに溯るかと思えますけれど、東南アジア、中近東、南中国、西アフリカ、それから核アメリカの五つの地域で、いろいろ作物は違いますけれども、農耕が開始されたんですね。これが人類史の第二番目の大きな転換点です。

そして第三番目の転換点は「都市革命」で、それはどういうものかというところ、農耕がどんどん発展しますと、全部の人が農業をやらなくてもよくなるんですよ。他の人が作ってくれた農作物に依存して、農耕以外、もっと他のことを人間はやっていいようになりますね。余裕ができるわけです。そういう人たちのことを、ゴードン・チャイルドは「社会的余剰」と呼ぶ。そういう社会的余剰ができて、その部分が都市民というものになるんですね。都市を造るんです。今まで農村だけだった環境の中に城壁を造ってですね、そこに都市ができて、都市民がその中で農耕以外のいろんな仕事を始めるわけですね。そこに王様を中心とする小国家ができる。都市国家が最初にできて、王様を中心として、その周りに神官がいて、それから書記がいて、文字がそこで初めてできます。文字を書いて記録することを専門にする書記がいて、それから職人とい

うものが独立してきますね。それから戦士というその都市を守る人たちも出てきます。また商人という交易をする人びと、そういう社会的な階層化が出てくるわけです。そして社会的な分化というものが行われて、その都市の中で、今までの農村の文化ではない、新しい、もっと強い意味での「文明」というものができてきます。文明のものと言葉、civilizationというのは都市化ということですから、civilizationとしての文明がそこで成り立つんです。文字ができると申しましたけれども、その後、文字で記された科学、原始的な科学もここで、エジプトやバビロニアでできあがります。それから法律制度もできますね。ハムラビ法典みたいな、王様が治めるために、いろんな文明の装置ができあがった。それが第三番目なんです。

もちろんその周りには広い農村があるわけで、農村の中にぼつつ、ぼつつと都市ができていく。そしてそれが世界中、伝播していくわけですね。メソポタミアに始まって、エジプト、インダス（インド）、殷（中国）、アメリカ大陸のメソ・アメリカ（メキシコとペルー）など、いろんな所でそれぞれ独自の都市文明ができあがっていくわけです。

その次に起こる第四番目の変革期が、今日お話ししようとしている「精神革命」なんです。

「人類革命」というのは霊長類、人間に近い霊長類、類人猿が出現するということから始まるんです。直立二足歩行を始める。そうすると手が空きますよね。手で道具を作るということで、はじめは石器みたいな道具が作られる。そこから人類化ということが起こってくるわけです。だからこれは、技術的な変革が一番主要なドライブになっている。道具の製作という技術的なものが主体になっていたといっているでしょう。

「農業革命」の場合は先程いったように、狩猟から農業生産へですね、在るものをもって食べていたのが農作物を作って食べるようになる。つまり経済的なものが主なるドライブになっているといい。採集経

済からそういう生産経済へと向かう。「都市革命」の場合は社会的階層化ということがありますから、社会的なもの、socialなものが非常に大きな動因になってくる。

「精神革命」はどうか。「精神革命」はですね、そういう技術的、経済的、社会的なものではなくて、まさに人間の内部の精神の変化——このことがここに始まるんです。これがやはり人類史の大変換だったと思います。内的な精神というものを人間が発見する。その精神によって、超越者というものを認めていく。

そしてそのような展望のもとに、人間の生き方を、いかに生くべきかということを、真剣に考えていく。そういう意味での精神史の始まりですね。具体的にいえば、高度宗教、哲学、そういうものが誕生する。

これは、ギリシア、イスラエル、インド、中国の四つの地域に並行して起こった。詳しくは後で申し上げます。時代は前六〇〇年位から紀元ごろまでということにしましょう。これは前に私がいった期間と少し違ってはいますが、このことは後で説明します。

「科学革命」は十七世紀に、これはヨーロッパがなすとげました。「精神革命」は、今述べたように四つの地域で、西からというとギリシア、イスラエル、インド、中国の四つの地域でほぼ並行して起こっているわけです。「科学革命」はそれに対して西欧だけに起こった。近代科学というものは十七世紀の西欧で起こったんですね。「精神革命」は、その四つの地域からいろいろなところへ伝播していきしましたが、「科学革命」も西欧に発してやがて地球を席捲します。全地球的な事件となります。我々も近代科学をどんどん取り入れて発展してきたわけですから、近代科学はやがて世界の所有になっていくわけです。

しかしまた、その近代科学というものが今、いろいろな問題を起こしているわけです。環境問題、核の問題、それからクローンを造ってみたり、いろいろな問題が発生してきている。科学が進み、科学に基づく

生産、そういうものがどんどん進むことによって、科学技術というものは、本来人間の幸福のためにあったものなのに、逆に人間を滅ぼしてしまうかもしれないというような側面をもってきている。

そこでもうひとつ、ここで大きく変革がなければならぬと思うんですね。つまり文明の形態がもうひとつ変わらなければならぬ。それを「環境革命」という。これは今起こっていると私は思っているのです。

今、六番目の「環境革命」の時代に我々は生きています。「科学革命」以後、もうひとつの大きな変革期に我々は直面しているというのが、私の文明論の大きなスキーム (scheme) なんです。

それでは「精神革命」の問題に入りましょう。

「精神革命」とは、その意味で人類史が経験した心の内なる変革なんですよ。そしてそれは、紀元前六世紀から一世紀の間に地球上の四つの地域に並行して起こっている。

まず西の方からギリシア哲学。これはソクラテス（前四六九—前三九九）が中心になっていると思います。ソクラテスは紀元前五世紀から前四世紀にかけての人ですね。

次はイスラエルの『旧約聖書』の預言者たちですが、それらの人びとにつらなってイエス（前四—後三〇）が出てくる。イエス・キリストのキリストというのは「油をそそがれたもの」、メシア（救済者）をさす一般的尊称で、固有名詞はあくまでイエスですから、以後はキリストではなくイエスという名称を用いることにします。この人は一世紀の人ですね。「精神革命」の他の人々よりずっと遅れています。

キリスト教を準備する上でのイスラエルの預言者の中で、エレミアと第二イザヤが一番重要だと思えます。この二人は前六世紀の人です（第二イザヤの年代はちょっとはつきりしません）。その前の前八世紀

から旧約の預言者はいるわけですけど、それで「精神革命」を今までは前八世紀からといっていたんです、旧約の預言者を全部入れてね。でもアモスとかホセアまで溯らなくても、エレミアと第二イザヤがいれば、ユダヤ教を考察するなら別ですが、キリスト教を中心にとりあげるならばそれで十分だということ、前六世紀からということになりました。

その次はインドにおける仏教ですね。これはゴータマ・ブツダ（前五六一―前四八六）が教えた宗教ですが、ブツダというのは「悟りをひらいた人」という一般名詞で、ブツダはほかにもたくさんいるわけです。だからあくまでも固有名詞はゴータマです。イエスが固有名詞であるようにね。このゴータマの生没年は、大きく分けて前四六三―前三八三と前五六一―前四八六の二説がありますが、私は後者の方をとっておきます。ですから前六世紀から前五世紀にかけての人ですね。そうすると次の孔子と同じ時代の人ということになります。

最後が中国における儒教の成立ですね。これは孔子（前五五一―前四七八）を中心とする。この人は前六世紀から前五世紀の人です。

ですから「精神革命」というのは前六世紀から後一世紀にかけて起こり、その中にこのような人たちは全部すっぽり入りますね。私は以前、前八世紀から前四世紀といっていたけど、紀元前八世紀は旧約の預言者たちの活動が始まるころ、紀元前四世紀というのはアリストテレスの時代。つまり、そこでギリシア哲学は一応完結する。これを「精神革命」と考えたんだけど、やはりイエスを入れないといけないと思うんです、「精神革命」というならば、そうすると後端を後一世紀まで下げざるをえないだろう。旧約の預言者だけはいけない。キリスト教に密接した預言者を中心に考えれば、前六世紀からとよいだろう。そして後一

世紀におけるイエスの出現において、イスラエルの「精神革命」は完成すると考えてよいと思うのです。

そこで、ギリシア哲学とキリスト教とは結びつきまして、ヨーロッパの西の方の、普通は西洋といっていますけど、この西方の精神文化の基盤をつくるわけです。いわゆる西洋の精神文化です。つまりギリシアに発するヘレニズムの文明と、それからユダヤ・キリスト教的なヘブライズムというのが結びつきまして、西洋文明というものをつくる。その精神文化の伝統が今日に至っているわけです。

東の方はどうでしょうか。仏教と儒教は結びついて、一応東洋としておきますが、いわゆる東洋の精神文化の基盤をつくった。現在においても、みなさん「論語」は読むでしょう。仏典も読みますよね。ずっとその精神的伝統は、このときにできたものを今でも受け継いでいるわけですね。

ですから、人類の精神史の原点をつくったものはこの「精神革命」で、この伝統は我々の現在でも生きているということがいえるんですね。いや、生きているというだけでなく、同時にいろいろな問題をも醸し出していることは事実でしょう。

このことを今日取り上げるわけですが、「精神革命」の内容を一口にいつてしまうと、それは人間の精神の発見、同時に重要なことは、その精神に対応する超越者を自覚したということなんです。この二つのことは結びついているんです。人間の精神の発見と、それに対応する超越者の自覚です。それが結びついているんですね。それを今日にはなるべく具体的にお話しようと思う。固有名詞を羅列するだけではなくてですね、中身に入ってわかりやすく話したいと思う。

ソクラテスの例からまずはじめましょう。ソクラテスにおける「精神の発見」とはどういうことなのか。

ない変なものを持ち出してきて、若い連中を誘惑している危険な人物だということで、裁判にかけられているわけです。そこで彼は自分を弁明しに出かけて行って、こう呼びかけた。

「息と力の続く限り、知恵を愛求しつつ、諸君にこう語ることを私はやめないだろう。敬愛する友よ、君はアテナイの市民でありながら、即ちこの最も偉大であり、かつその知恵と力とのゆえに、最も名高い都市の市民でありながら、ただ財産を出来るだけ多く蓄えようとか、名声や榮譽を得ようとか氣遣うだけで、識見や真理や魂（プシューケー）を出来るだけ善くあるようにとは氣遣いもせず、配慮もしないことを、君たちは恥じないのか。」と、こう訴えたんですよ。

この訴えの意味は、我々にはわかりますよね。ソクラテスがここで何をいいたかったのかということはわかる。だから私は共感し、感動した。みなさんもおおよそ理解できると思う、何をソクラテスはいいたがっているのかわかる（これは実は我々がソクラテスらの「精神革命」の後に生きているからなんです）。ところが当時のアテナイの人は理解できないんです。できないから裁判にかけられるんだけれど、彼らにとつてこのプシューケーとは一体どういうものだったんだろう。

ひとつはホメロスの伝統からくるプシューケーのとらえ方で「亡霊」と訳しうる。それは人間が死んだときに吐く息なんです。最後の息、それがプシューケー。それは生前の人と同じような形を持っているんです。それが死ぬときすうっと抜けて行って、黄泉の国に行くんですよね。そして時々出てきて、生きた人に出会うわけです。例えばパトロクロスの亡霊が出てきて、かつての友達であるアキレウスに会って、「おれはこんなに惨めになっちゃったよ」と話しかける。そういう煙のような、影のような、スキエーとかカプノスといわれているけど、煙のような、影のようなものがプシューケーなんですよね。日本語では亡霊といつて

もいい。そんな亡霊としてのプシューケーの考え方が、一般のギリシアの市民の間に広がっていた。それに対して、新しがりやの知識人の間ではプシューケーとはイオニアの自然学でアナクシメネスがいつている空気と同一視されたんです。プシューケーという名詞をプシューコー（psykhō）と動詞にすると「息をする」という意味になります。空気を吸うことですね、そこではプシューケーは我々が吸っている空気と同一視されて、それを吸うことによって生命を維持する生命の原理とされるわけです。我々のプシューケーは空気であって、それが我々を生かし、保っているということをアナクシメネスはいつていますね。

そこで「プシューケーを配慮する」ということは、一方ではホメロスの意味で「亡霊を配慮、大事にしろ」ということになり、他方で、アナクシメネス的なイオニアの自然学の立場では「空気を大切にしなさい」ということになるんです。わからないですよ。それでアリストファネスという喜劇詩人は、ソクラテスをカゴに乗せて、ずっと宙づりにして高く上げてね、高いところの方が空気がきれいだから、そのところでソクラテスがいい空気を吸って何かを考えているという描写を行っています。これは揶揄しているわけですよ。ソクラテスは何か変なことをやっているのとらえていて、アリストファネスは全然ソクラテスのいつていることを理解していないというのはこれでもわかる。

そういう事態だったんです。だからこのソクラテスの言葉を、本当に正しく理解することができなかつた。そのことの裏を返せば、今やソクラテスはこの前人未到の精神の内的フロンティアを初めて開拓しつつあったということなんです。プシューケーの考え方を新しく規定し直すことによって。

このソクラテスの倫理的主体、道徳的的自我としてのプシューケー。亡霊的靈魂のように、無為無力のものじゃない、自然学者のいうように物質的、没価値的なものじゃない、そんなものじゃなくて、それは善き行

為、正しい認識、そういうものを目指す道徳的な魂のことなんです。そしてその魂の善さを保つことがソクラテスのいう徳（アレテー）なんです。知者のいつているアレテー、あんなのは徳じゃない、単なる器用さだ。そんなもんじゃ無い。ソクラテスが「精神」を発見したというのはこの意味なんです。

このプシューケーが発見され、精神が発見された。魂をここに精神と言ひ換えてもいい。ソクラテスの精神の発見は、同時にその精神が見るものをも新たに発見していくんです。それが「イデア」(idea) というものです。

イデアというものは、聞いたことがありませんが、何か難しい哲学だと思われるかもしれませんが、日本語で思いきって訳せば、まあ「理想」だと考えてください。あるいは「理念」ですね。魂は理想、理念を持つことができるんです。そしてその理想に近づこうとする、そういう人間の理念的存在がはじめて設定されるのです。

例をあげましょう。例えば三角形。ギリシア人はすごく合理的な民族だったんですね。ソクラテスもすごく合理的な人ですよ。彼の間答を読んでごらん下さい。論議しても、へたなことをいったら、すぐソクラテスにやりこめられてしまう。それくらい合理的に徹底した人ですよ。

だけど、そういう合理的に徹底したものを、ギリシアの学問のうちで最も大切にしたのが幾何学です。幾何学がギリシアの学問の典型となっています。ところでこの幾何学の中に三角形というものがありますね。その三角形の内角の和が一八〇度だということですよ。一八〇度になるはずなんです。分度器で計ってみましょう。きっちり一八〇度ですか。そうはいきません。一七九度だったり、こんな風に大体描いたんですからね、ぴたつとはいきませんよ。現実には描かれた三角形は本当の三角形ではないんです。

それに対しイデアの三角形。イデアの三角形はぴたつと一八〇度ですよ。そしてイデアの三角形は幅のない線で書かれています。線に幅があったのでは、正確には線にはなりません。線は長さだけあって幅のないものなんです。本当に純粋な幾何学が成立するこうした場がなかったら、精密な証明はできないですね。

ピタゴラスの定理。この三角形の直角に対する辺の上の正方形の面積は、他の二辺の上に見える正方形の面積の和に等しい。こういったことを一步一步証明するんですが、その一步一步の証明たるや、そのイデアの世界で行われているんです。だから正確な証明ができる。このイデアの世界を発見しているんですね。これはちょっとわかりにくいでしょうが、線に幅がないといわれると困りますか。点というのは位置だけあって、大きさがありませんよ。そういう世界がイデアなんです。それは精神の目で見なければならぬ。感覚の目では近似的にしかとらえられない。

もうちょっとわかりやすく、倫理学の話に移して「正直」のイデアというものがある。正直のイデアというのは正直らしい人たちを集めて、抽象すればそこから正直というものが出てくるんですか。ソクラテスにとってはそうではない。正直のイデアというものがまずあって、その正直のイデアと比べられて、この人は正直な人だ、あの人はあまり正直ではないという判断が下される。「正直」らしい人といいたけれど、その前に実は正直とは何かを知っていなければならぬ。現実には完全に正直な人はいないかもしれないが、我々は正直のイデアというものを精神の目で見る事ができるんですね。そして、それによってむしろ現実が判定されているのではないですか。逆なんです。あの人正直だというのなら、その前に正直のイデアを我々は知っていないければならない。そしてその人の具体的行動を、これは感覚でとらえられますね、それと比べてみて、正直な人だとか、そうではないといえるわけで、こういうイデア、理念、理想の状態がま

ず考えられねばならない。これが魂の新解釈、精神の発見ということに対応する、超越者の発見なのです。先程いった、人間の精神の発見と超越者の自覚というものはひとつながりのことなんだといったのは、そういう意味なんですね。

このイデア論はプラトンによってもっとどんどん発展していきますけど、今日はその話じゃなくて、その合理的なソクラテスが、自分の倫理的行為を行うときにダイモーンの声を聞いたということ、これに注目したいですね。

なぜならば、合理主義者だから神様なんかなくなるんじゃないか。数学で全部やればいいんじゃないか。計算でやればいいんじゃないか。こんなふうにはならなくて、一面において、あんなに理屈っぽいソクラテスが、本当にいかに正しく行為すべきかというときには、ダイモーンの声が聞こえてくる。

ダイモーンは、一応「神」と訳しておきましょう。ダイモーンというのはいろいろな意味を持ってきます。後世ではちよつと悪い意味も持ってきますね、低い神様みたいな。ソクラテスは悪い意味で使っていない。人間に近い神の意味で使っていると思いますが、そのダイモーンの声を聞くんですよ。そのダイモーンがですね、なんとというかというと、何々しろとはいわない。今ソクラテスが迷っていることをするなという否定の形でのですよ。

だからソクラテスが選んだ倫理的行為は、あくまでもソクラテスの主体的行為です。なぜならば神様の指示じゃないですから。神様がなんでもいってきて、そのとおりにするなら、それはあやつり人形でしょう。そうじゃないですよ、ソクラテスは。だけど、「するな」ということは耳を澄まして聞きました。

例えば裁判が起こる。アテナイの町から逃げちゃえばいい。ギリシアのポリスは皆独立ですからね。他のポリスへ行ったら捕まえようがない。ダイモーンの声が、「逃げてはいけない、逃亡なんかするな」という声が聞こえてくる。それで彼は裁判場へ行きますね。それをやったのは彼自身のことです。別に神様に教えられて、裁判所へ行つたわけではない。それは彼自身の選択です。ダイモーンの声をたんに反復したわけではないですね。

このダイモーンということに注目する人が、ソクラテス研究では少ないんです。みんなソクラテスの合理主義の方ばかり見ちゃうから。だけどそれだけではいけない。ソクラテスにはダイモーンがいた。これは非常に重要なことなんですね。

それではこのダイモーンは一体どこから来るのかということも、もうひとつ問わなければならない。これはまだ誰も答えていない問題です。

私はどう考えているかというと、ギリシアにはホメロスの宗教の他にオルフェウスの宗教というのがあった。ホメロスの詩に出てくる神というのは非常に人間的ですよ。神様のやっていることが人間とあまり変わらないじゃないですか。悪いことを随分とやっていますよ。姦通してみたりね、ゼウスなんて本当に色狂いみたいなことをやっている。

だけど、オルフェウス教の神というのはどういうものか。オルフェウスによれば、かつて人間の魂、プシユケーは神々と共にあった。それがあるとき、その魂が地上に落ちて、肉体の中に閉じ込められた。だからある意味で肉体は魂の牢獄なんですね。その牢獄に閉じ込められながら、なお善きもの、正しいものを求めて、魂は向上しようとするんですね。

プラトンは『パイドーン』のなかで、ソクラテスが毒杯をのんで死んでいくときのことを書いています。

「私は何も恐れることも無い。なぜならば、そういう神々の善き人たちの魂のところへ帰るんだから。私はその日のために哲学をしたんだ。」と、哲学は「死の演習」だと彼はいつていますよ。それはまさにオルフェウスの宗教だと思ふ。

このオルフェウスの宗教を、ソクラテスはピタゴラスから受け継いだのだと思ふ。ピタゴラスはオルフェウスの徒であるといつていいと思ふ。ピタゴラスは一面において、「ピタゴラスの定理」を発見したほどの合理的数学者ですよ。その合理的数学者と宗教的感情は矛盾しないんですよ。ピタゴラスの場合、非常に鋭敏な鋭い合理主義は、深い神秘主義と結びつくんです。それで魂を浄化するため、ピタゴラスは音楽をやるんですね。音楽は何のためにあったでしょう。ピタゴラスにとつて、それは魂の浄化のためでした。そしてそれから大変なことが発見されてしまった。協和音程という、弦の長さが $2:3$ 、 $3:4$ 、 $4:5$ の整数的な比例をなすときに、いわゆる協和音程、和音ですね、調和した音が出現するんですね。それからピタゴラスは、この音程の数学的調和から宇宙の数的調和というところへ拡げていつて、万物は数からなるという近代の数学的自観につながるものをそこで創ってしまうわけです。

事実、『パイドーン』で立ち会った人たち、シミアスその他の、ソクラテスの最後を看とった人たちは誰であったか。それはソクラテスの直弟子というよりも、ピタゴラス学派の人びとですよ、シミアスかなんかは。このオルフェウスの魂の教説の進化、これがソクラテスにおける精神の発見につながったと思います。

次にイエス・キリストの場合をみていきましょう。イエスの場合はどうだったろうか。イエスの前にはユダヤ教の律法というものがあつた。

この律法（トーラー）というのは、こうこうすべし、こうこうすべしといきまきまりですね。唯一の神以外は信じてはいけけないに始まる「モーゼの十戒」が有名でしょう。人を殺してはいけけない、姦淫してはいけけない、盗んではいけない、いろいろありますね。神様とこのような契約を結ぶわけです。あなたしか信じませんとか、それから安息日には働いてはいけけないと書いてあるから決して働きませんと契約を結ぶわけです。

ところでこの律法というものがだんだんユダヤ教の中で非常に煩雑になっていきます。どんどんと付け加えられてきて、日常生活の隅々まで律法のがんじがらめの網の中で、ユダヤ教徒は過ごさなければならなくなつてしまいます。

それを守れば守るほどいいというわけで、とくにパリサイ人たちは、安息日に仕事をしないという律法は、みな守っている。神様との契約を守っているから、自分が一番偉いと思つているわけですね。そのときイエスは何をやっていたのか。例えば足がなえて歩けなくなつた人がいる。当時はローマの支配下で、抑圧された民衆は、「病は気から」という言葉もあるように、いろいろな具合が悪い人がたくさん出てきた。それをイエスは治して歩きました。

そういう原因だから、実際に治つたと思ふ。本当に精神的な心因性の病気なら治りますからね。「あなたの罪はもうなくなつた。だからあなたは歩ける」とイエスはいつた。そうしたら実際歩いてしまつたんですね。

でもそれをやつたところが正にユダヤ教の会堂の中で、しかも安息日だった。パリサイ人を含めみんな集まつてくるわけだ。そして安息日にあんな治療をしていいのかということになりますよね、イエスにね。

そうするとイエスがいつた言葉は「安息日のために人があるのではない。人のために安息日があるのだ」

と。これは驚天動地だったでしょうね、当時のユダヤ人にとっては金科玉条の律法でしょう、それをひっくり返したんだから。安息日のために人間はあるんじゃないやなくて、まさに人間のために安息日があるんだ、と。今ここで立てない人をどうして、安息日だからといって見放すのか。どっちが重要なんだという問題を突きつけるわけですよ。パリサイ人は、これはもうびっくりしたでしょうね。何しろ彼らは律法漬けですからね。

ある女性が姦淫をした。姦淫をするというのは強い律法ですよ。みんな彼女を追い詰め、石を投げる。イエスがそこを通った。彼らはいう。「どうだ、この女はもう姦淫の罪を犯したぞ。どうしたらいい。」そうするとイエスは黙ってしまって、しゃがみ込んで土に何か書いていました。沈黙が流れた。そしてイエスがいったことは、これも有名な言葉です。「汝らのうち罪なきもの、まず石もて打て」と。これを聞いて一番年をとった人がまず石を落とした。またその次の人も石を投げ捨てた。結局みんな石を落として去っていったというんですね。そしてその女性に対して「今あなたは許された。もう再び罪を犯すな。」といったわけですね。それがマグダラのマリアだといわれています。このマグダラのマリアは、その後イエスにずっとついてゆきますが、ここで行ったことは一体何なのでしょうね。

それは結局、律法というものを愛に変えていったということなんです。もちろんイエスは律法を壊そうとはしていないといっていますね、聖書の中で。自分は律法を壊そうとして来たんじゃない、かえって律法を完成させようとして来たんだ、と。しかし律法を完成させるためには愛がなくてはいけない。冷たい裁きだけではだめですね。愛というものがあってはじめて律法が完成するんだと、これをいっているわけですよ。

ここにはやはり他人に対する、他人の苦しみ、悲しみ、それに立ち入っていく心の存在というものがあてでしょう。心の存在というものが出てくるわけで、ですから、これはやはり「精神革命」なんです。律法を形式的に守っているのは、本当の心はいらない。杓子定規にやっていたらいいのだから。だけど本当に律法を生かす、本当に律法を完成する、本当の意味で人間のあるべき姿を人に伝え、また奨めるには愛がなきゃいけない。

そして「神があなたを愛してくれるように、あなたもまた隣人を愛しなさい」というのが、イエスのキリスト教の根本的メッセージでしょう。この愛をキリスト教ではアガペー (agape) と呼び、エロース (eros) と区別する。

これは『新約聖書』の中ではじめて出てくる。アガペーというのは、愛という精神の発見というものがあって、そしてこの精神が、彼がアッパと呼んだ、「お父さん」といっていた神ですね。これが彼における超越者です。アラム語でいうエルという神ですね。イエスはアラム語で語っていた。ですから最後の十字架の上で、「エリ、エリ、我が神、我が神、なんで私を見捨てるのですか」と呼びかけている。

次に仏教に移ろうと思います。仏教ではどうだったろうか。ゴータマ・ブツは何を発見したのだろうかという問題ですね。ゴータマがこの世界で見たものは、まず苦です。この世の人生苦です。

老・病・死・苦というけど、生まれてくると、病気になる、年をとるいろいろな苦しんで死んでいく。ゴータマは、そういう人間の、あるいは生物一般の悲しい運命、彼は大きな鷹みたいな鳥が鳩を食べ、鳩がもっと小さな虫を食べている、そうした情景をじっと見ている、彼は王子なんだけど、そういう生あるものの苦しみというのに敏感な少年でした。

では一体、その人生苦というものは、老・病・死・苦という人生苦というものは、どこから出てくるのだらうということを追究した。

彼の得た結論は、それは執着ということにもとがあるということだったんです。この世は諸行無常でどんな変わっていくものなのに、それが何か不変の実体であるかのようにしがみつくと。お金にしがみついたり、ものにしがみつくと。人によつては女の人にしがみつくかもしれないですね。もう別れると知っているのに、どこまでもしがみつくと。人によつては女の人にしがみつくと。みんな執着ですよ。この世にあるものは皆、諸行無常なんです。そこには不変な実体というものがないということ。それを彼は見とって、縁起の世界に注目します。

縁起ってわかりますよね。いろいろな縁があって、因があって、結果が出てくる。それがずつと果てなくつながって、変わっていく、そこには変わらない実体なんてものはない。しかしそれがあるかのごとく錯覚して、それにしがみつくと。それをタンハ (Tanha) といいます。これはサンスクリット語で、日本語では「渴愛」と訳します。「渴」というのは「渴く」ですね。喉の渇きのような激しい欲望の愛で、それで移り変わるものにしがみつくと。それが苦悩の原因なんだ、と。

だとすると、人生の実相をよく見て、絶えず流れていくこの縁起の世界——それが「空」という意味なんですよ。「空」というのはからっぽということじゃなくて、この縁起の世界だということが「空」なんですよ。「空」といっているのはそういう意味なんです。すべては縁起の世界で、実体のような、実体というのは不変のもの、変わらないもの、そういうものはない、というのが「空」。

そのような「空」の実相をつかまえて、その渴愛の火を消すことによって、ニルヴァーナ、つまり涅槃というものに到達するわけです。煩惱を吹き消したニルヴァーナの世界に至る。それを四諦 (したい) という

ているわけです。四つの真理、第一に「人間の生存は苦である」という苦諦、第二に「人間の苦悩は渴愛にもとづく」という集諦、第三に「渴愛を完全に滅し、従つて苦を滅し去つた涅槃が、解脱の理想境である」という滅諦、最後に第四の「この苦の滅に導く修道法に八正道がある」という道諦、この四つの真理を体得すれば、そこに悟りが得られるというのです。

この四つの真理を悟って、解脱 (モークシャ) ということがそこに実現するわけです。ここにも「空」というものを見つめる心があるはずですよ。そしてそれに対して、そういう涅槃の世界という一種の「超越」があるわけでしょう。この両者が結びついている。だからこれも「精神革命」です。

よく仏教では「無我」ということがいわれますが、これは我欲の対象である、実体としての自我はないということ、悟りに向かつてつとめる精神的主体としての自分はあくまで存在するのです。これはゴータマの入寂の最後の遺言として、「私のなきあととは、お前たちは (仏教を修める) 自分自身をよりどころにし、他人をよりどころにしてはならない」といっていることからわかります。

次に孔子の場合に移りましょう。孔子は一体何から出発したんでしょう。孔子は礼ということから出発した。た。

礼とはなんでしょう。礼というのは人の行うしきたりですね、ひとつの儀式です。人間が行うフォームですよ。これが礼なんです。お葬式はこういうふうな次第でやります、結婚式はこういうふうにやりますと、冠婚葬祭というのは皆そうですね。

孔子がそこから出発した儒家集団というのはなんだったかという、この礼を研究する集団だったんです

よね。易しくいうと、冠婚葬祭屋だと考えてください。冠婚葬祭屋だから、お葬式ではこういうのはいけませんよというようなことを知っている、よく儀式の次第の知識を持っているわけですね。それで人に雇われるわけだが、それには下等儒（カトウジュ）と君子儒（クンシジュ）とがあつて、下等儒というのは民衆のために、君子儒とは貴族のために儀式をとり行なう。その人たちは黒い着物を着ていました。なよなよとした儒服というのを着ていた。「儒」というのはこの「なよなよしている」という意味ですが、おそらくその服装がなよなよしていたんでしょね、職業集団の服装からきた名称ではないかと思えます。

彼はそこから出発した。なぜそこから出発したかというと、お母さんが下等儒だったからです。民衆のための礼をやっていた。冠婚葬祭をやっていた。民衆が必要なときは出かけて行って、そのしきたりを教えていたわけです。

お父さんはいえ、その祖先は宋の国の偉い人で、まあ陸軍大臣、そんなようなイメージを持ってください。お父さんは武人で偉丈夫（イジョウブ）だった。だから孔子も背が高かったし堂々としていた。

どうしてそんなお父さんと下等儒のお母さんが一緒になったのかというと、どうしてそのようにして孔子が生まれたのかといえば、『史記』を読んでみると、その中に「孔子世家」という司馬遷の書いた伝記があつて、「野合」と書いてある。この「野合」という言葉を見た人はびっくりするでしょうね。何かそのような事情で孔子は生まれた。孔子は生まれたけどお父さんがいない。さらに若くしてお母さんが死んでしまったから孤児になった。このお母さんを父のところに葬ろうとしても、その父の墓もわからず、ようやく阪（スウ）の曼母（マンボ）という女に聞いて、やっと防山というところにあることがわかり、そこに合葬した。彼はそういう辛い生涯をもっています。

彼の『論語』を読んでいると、「君子は器ならず」という言葉がありますね。君子というのは器用であつてはいけないといっているんです。どういうことをいっているのかというと、彼は貧しかったからなんでも自分でやってしまった。大工仕事もやったり料理も作った。なんでもやったから器用になつてしまった。

これではいかん、おれは君子なんだからこんな器用じゃいかん、おまえたちもそんなに器用になつちやいけないう、こう教えているんです。これはとてもユーモラスですよ。しかし、そこから人生の裏の悲哀が読み取れますよ、彼の若き日の苦勞が。だけど、それから下級官吏になつて、だんだん魯の国の大臣級の偉い人になるんです。

だけど政治家としては失敗、すべて失敗でした。彼は最後に政治から離脱して、精神の教師になろうと転換するんですね。そして「朝に道をきかば、夕べに死すとも可なり」と、一所懸命に「道」を求めますね。道というもののね。人の道は、儒教においては同時に国家の進むべき道なんですよ。なぜなら儒教では、「修身・齊家・治國・平天下」ですから、両者は結びついているわけです。人倫と国家の倫理が結びついており、それで諸国の君主たちを説得しようとして歩いてまわるのですが、なかなか容れられない。

最後に彼は弟子を教えることに専心する、そういう方向へ転換していきました。そしてこの礼、礼の大家なんだけど、この礼を説いていて、ここでまた大きな転換をした。それが精神の発見と関係があるんです。

この「礼」というものに「心」「精神」はあるのだろうか。こうやりなさいといわれて、こういうしきたりだからやっている、そういうことだけに意味があるのか、孔子は考えます。そして「人にして仁にあらずんば、礼を如何せん」ということになる。

「仁」というのは難しいですね。一応、慈しみの心と解してください。しかし『論語』の中で一箇所だけ、

「仁」とは何ですかと問われて、「人を愛す」という言葉があるんです。ここだけが注目されていて、仁というのは人を愛することだという通念がでちゃっていますけど、なんと『論語』では一箇所しかそうしていない。実際には、孔子は「仁」をいろいろと書いていて、暗中模索しています。単なる人間の意味にも使っています。

「仁」は中国語で人と同じく「レン」と発音します。にんべんに二と書いて、二人の人間の関係をいつているんです。「忠恕」(チュウジュ)ともいつていますよ。真心をもって接する。慈悲の心をもって許す。そうしたさまざまな試みを経て、彼はついに慈しみの心、人を愛する心、そういうものがないならば礼を如何せん、礼をやっても何の意味もないじゃないか。お葬式に行つて、まず焼香して手を合わせてくる。だけど亡くなった人のことを思つて本心に悼む——その仁の心がないならば、そんな礼を形式的に踏んだって何になる。こういったんですね、孔子は。

これはやっぱり大きな革命じゃないですか、その前の儒家集団が形式的にやっていたことを見れば。礼を仁に転換したという、大きな「精神革命」がそこにあつたと思うんです。

さてここで、この仁を問題にした孔子が、やはり最後にまた天に戻つたということが注目される。天は超越者ですね。

晩年の言葉に天が盛んに出てきますよね。顔回(ガンカイ)が死んだとき、天を恨んで「天我を滅ぼせり」とか、いろいろ出てくるんですよ。「天は決して私を見捨てない」とか、そこに彼の確信があるんですね。彼は旅をしているとき、いろんな危険な目にあっています。そういうときの言葉です。もともとこの道というのは、天道というような観念が周代にあつて、もつと溯れば殷の時代には天帝という観念があつて、

それは神話的なものですけど、それをいわば地上に引き摺り下ろして非神話化したものですよ。そしてこの世の倫理的な概念になつたものが道なんですが、ふたたび天へ戻っていますよね。

彼の内在的な仁の確信は結局、終局的には天というものと結びついていることになる。しかしそれはもはや神話的なものではなく、この世の道徳的实践を支えている超越的原理ですね。ですから、人間の精神の発見と超越者の自覚というものは、ここでも相即的であるといつてよいでしょう。これが「精神革命」の実相なんだと思う。それを私は「内在的超越」といつてみたいのです。つまり人間の精神に内在しているものが、その中にすっぽり入り込むのじゃなくて、それを超えたものを自覚する。しかし超越的超越じゃない。はじめからこの世を超越している超越的超越ではない。あくまで自分の精神、内在的なものに結びついていた超越というものがある。内在的内在でもない。内在的内在というのは、超越者がみんな自分のところへ持つてきて自分の中に解消してしまう。こういうものでもない。

実は今日初めて、みなさんの前でこの概念、「内在的超越」という言葉を使うんです。ちょっと難しいかもしれませんが、いろいろ考えた末、ここにたどりつきました。「内在的超越」というのは、結局人間の「精神の発見」と「超越者の自覚」との相即的關係なんです。

さて、あと残された時間で現代的課題を取り扱いたいと思います。その前にちょっとまとめておきましょう。

人類史における第四の変革期となる「精神革命」は、実に偉大な世界史の曲り角をつくりあげました。それは人間の「精神の発見」とそれに伴う「超越者の自覚」です。この人間の精神性(spirituality)を超越

者との関係でとらえるとき、それを「靈性」といつてもよいでしょう。

以上見てきたように、「精神革命」の四つの系譜は、この究極の靈性を求めて、同じ山を異なった登山口から登りつつある僚友のように思われます。ソクラテスにおける「イデア」、イエスにおける「アガペー」、ゴータマにおける「慈悲」、孔子における「仁」というものには、根本的にいってそこには通底するものがあります。このうち仏教の「慈悲」についても少し補足しましょう。

先に述べたように、ゴータマの仏教では縁起の世界を見つめ、そこから「空」の認識にいたり、解脱して「涅槃」（ねはん）の境地に入るわけですが、これを「往相」といいます。しかし往くだけではなく、「空」を達観した涅槃の境地から再びこの現実の世界に還ってくる。これを「還相」（げんそう）といいます。その「空」の立場に立った人が、再びこの世界に戻ってくる。そうすると世界は一変して見えるでしょう。今までの区々たる、小さな我欲によって引きまわされていたけれども、それがすっぽり取れて、もつと大らかな利他の行為を行いうる。それが菩薩行ですね。

そこに出てくるのが本当の「慈悲」ですね。サンスクリット語でいうマイत्रीとカルナーです。仏教の慈悲というのは、そういうことよって、はじめて実現できるわけですね。往相で「空」の世界へ一度往く、そして還相よってこの世に還ってきて菩薩行を実践するわけです。これは大乘仏教が後に、非常に強調するところなんです。このことを大乘仏教は主題として取り上げた。

「精神革命」の四つの系譜は、各々違った道筋ではあるが、同じ方向に向かっているのではないか。

いわば「究極靈性」を求めて。キリスト教の「アガペー」でも、仏教の「慈悲」、孔子の「仁」でも、ソクラテスの「イデア」も、確かに違った形をとっている。それは同じ頂上、山の頂きを求めているのだけ

ど、登山口は違っている。しかし求めるところはひとつである、というふうに考えてよいのではないかと思えます。そこから「精神革命」の現代的諸課題」の第一番目の問題が出てくるわけです。みなさんにお配りした資料2の中の「その1 自宗教中心主義」です。

前六世紀から後一世紀にかけて成立した「精神革命」の成果は、三世紀から七世紀にかけては、ヨーロッパのキリスト教化、中国の仏教化、イスラム教の成立という「第二次精神革命」を経て、今日に至っている。それは世界的に大きな伝統をつくりあげ、人間の精神生活を向上させてきた。それは超越者との関係において、自己のエゴイズムを克服し、もつと大きな相互関係の中で生きてゆくことに貢献した。しかし皮肉なことに、今日ではその宗教自身がエゴイズムに陥り、「我が神尊し」の自宗教自身主義というエゴイズムを固守しているのはどうしたわけだろうか。ここがどうもわからない。むしろ諸宗教は人間の幸福という共通の目標に向って、異なった登山口から登頂を試みる僚友ではないのか。同じ登山仲間じゃないのか。道が違っているだけです。Aのルートを辿るか、Bのルートを辿るか、Cのルートを辿るか、それだけのこと。

求めるところは同じなのだということをお覚すれば、一体どうして自宗教中心主義というものがまだ続いているのだろうか。そして宗教の名における戦争が行われるのだろうか。諸宗教は結局、同じ頂上に向かっているのだらうか。対立者というよりむしろ協力者であるべきです。互いに学び合うところはあつたままな道程であるから、同じ道程であるから、対立者というよりむしろ協力者であるべきです。互いに学び合うところはあつた、滅し合うものではない。地球上の諸文明が共存してゆかねばならないグローバルな時代に、自宗教中心主義をのり超えて、他宗教の存在や意義についても認識を拡げて、「究極靈性」に向かつて人類共通の精神的基盤を確立せねばならないと私は思います。

今もやっていますよね、キリスト教とイスラム教、ユダヤ教とイスラム教、がちゃがちゃと互いに争って

いる。しかし考えてみてください。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、彼らの信じている神はみな同じですよね。エルと呼ばれたキリストの神、『旧約聖書』はエローヒムですよね、同じです。それからイスラム教のアッラーの神、アッラーから定冠詞の「アル」を取るとイッラーということになって同じです。これらは全部同じ一つの神様です。それなのにその同じ神を信じて、互いに殺し合っている。考えられないことです。

私は現在存在している宗教をそれぞれ尊重しています。それぞれの偉大な伝統を敬意をもって率直に認めます。しかしそのそれぞれが、自宗教中心の排他的なものになっていくことに大きな危機感を持ちます。どんな「精神革命」も愛や寛容を説いたはずですよ。しかし自宗教中心主義、ego-religionともいべきエゴイズムの宗教版、これを克服しないで、なぜ「人間のエゴイズムを捨てなさい」なんていえるのですか、おかしいじゃないですか。これが申し上げたい第一点です。

第二に、環境破壊によって地球的規模の危機が出現して、その克服が人類の最大の課題とされている「環境革命」の時代において、今までの「精神革命」の伝統が、これに十分に答えを持っているかというところではない。なぜなら「精神革命」の時代は、環境問題というものについての思想、視点がそもそもなかったから、当然といえば当然です。そこでは人間の救済ということが中心で、まだ自然と共生なんてことは考えられていない。その意味で人間中心主義です。

もともと仏教がそのことを考えたかもしれない。「山川草木悉皆成仏」ということで、自然を含めた救済を求めたといえましょう。その点をどう考えるか。「環境革命」における宗教の位置というものを今考え直さなくてはいけないんじゃないかというふうに思うわけです。

ego-religion じゃなくて、「エゴ」の「ゴ」から濁りを取ってください。そうすると eco-religion ということになる。このエコ・レリジョンという言葉を最初にいわれたのは日文研の山折哲雄さんですが、しかしこの eco-religion が本当に成り立つためには、自然と人間の間がもう一度根底から考え直されねばならないのです。

世界はビッグ・バンから始まりました。バーンと大きな爆発によって、どんどん宇宙が大きくなってきて、その中に銀河系ができ、銀河系の中に太陽系が形成された。太陽系の中に地球ができて、地球の上に生命が誕生し、そしてそれが進化して我々人間となり、さらには文明の形成に至りました。これは通観してみますと、宇宙は生きた自己組織系なのです。宇宙は自分自身をだんだんと創っていく自己組織系なんです。

この流れはただごとでないですね。ここにひとつの大きな形成力を見ますよね。それが神なんだと私はいたい。神というのは何か遠くの方で宇宙から離れて存在していて、「世界よ成れ！」と命令したから世界ができたなんてものじゃないと思いますね。そうじゃなくて、宇宙の自律的發展を支えている、なんともいいたくない壮大な力、これが神なんです。そう思うんです。

ですから、それが「内在的超越」なんです。内在していて、その中の超越なのです。結局、我々自身が宇宙の長い歴史を背負っています。そしてやがて我々はまた宇宙に戻っていくのです。

例えば、みなさんの体をつくっている元素の中に、何が一番多いですか。水素、酸素、リン、炭素、窒素、その他カリウムやカルシウムや鉄がなければ生きていけない。そういうのはみんな、一五〇億年の宇宙の歴史の中でつくられる。超新星爆発というのは、星の中で重い元素がつくられて、星が爆発して、それが

またひとつになって、また爆発して、もっと重い元素ができてということを繰り返して、地球ができるころには、地球にそのような元素が集められて、みなさんの体をつくっている。

ということは、みなさんの体は星屑でできている。四十五億年の星屑でできている。みなさんの体の中の体液のナトリウムイオンの濃度を調べると、大体海のそれと同じパーセンテージ。一定で増えもしない、減りもしない。だから魚が生きている。そうではなく、死海みたいになっちゃったら魚一匹生きられないですよ。

ということはなんだろう。私たちもかつては魚と同じように水の中にいた。体液の中にその証拠を持っている。そして両生類になって、陸上に上がって、爬虫類になって、哺乳類になって、やがて我々ができるといふことですよ。

みなさんは宇宙の歴史を背負って生きています。長い長い宇宙の道のりの所産なんです。我々は宇宙から出てきて、宇宙へ還っていく。そういう宗教をなんて名づけたらいいのかなと、私はつくづく考えました。そしてそういう宗教観をいただいた人たちがいたことに気づきました。

西の方から一人あげてみると、それはゲートです。ゲートのキリスト教はそういうものでした。内在的な万有神論。神が自然の中において、宇宙の力みたいなものが、結局神なんです。スピノーザの神即自然というもののなんです。

今度は東の方から一人あげましょう。宮沢賢治です。宇宙から来て、やがて宇宙へ戻っていくという心情を、彼は書いていますよね。「宇宙の微塵となりて散っていく」という有名な詩がありますね。

ゲート、宮沢は「宇宙教」だった、あえて「教」をつければ。英語でいうと cosmic religion ということ

になる。こういうものが「環境革命」における宗教としては、私は力を持ちうるんじゃないかと思う。自然が我々の対立者だという考え方、これは今までの伝統的なヨーロッパにあった考え方、それに基づいて自然を攻撃して支配する。そこから搾取してくる。それが人間の幸福を増進させるということをやってきた結果が、今日の環境破壊になった。自然の上に人間の王国をつくるんだとがんばってきたわけですが、下の方で、搾取された自然がガラガラ音をたてて崩れていく。その上の人間の王国も、今や危殆（キタイ）に瀕している。人類の滅亡だって非常に現実の問題として見通せる時代になってきたと思うんです。

人間と自然は対立するのではない。人間はそもそも自然の一部なのです。それは自然の一番の末っ子なんです。それが親の自然を殺していいのか。そんなことを許す自然観はどこがおかしい。こう考え直すことによって、人間と自然の関係が、共生関係も自ずと樹立されてくるでしょう。近代ヨーロッパ哲学——典型的にはデカルトやF・ペイコンによってうち立てられた人間と自然の対立関係は、もつと溯れば西にも東にも存在せず、人間と自然をつなげてゆく自然観・世界観があったと思うのです。例えばソクラテスの衣鉢をつぐストア哲学、キリスト教のユニテリアン、仏教のなかでは密教、儒教の伝統では宋学——それらは皆、人間と宇宙の一体化を目指していました。

我々は今、「精神革命」の成果をあらためて、こうした方向において再定位しなければならぬのではないか。そのことによって「環境革命」にも適合した宗教的心性が自ずとつくり出されるでしょう。

最後に第三の問題として、科学倫理というものを現代の宗教は提示しうるのかという問題があります。現代において科学は、一方において巨大なメガマシーンとして一人歩を進めて、どこに行くかわからない。

人類のためと称して、いろんなことをやるんだけど、やればやるほど危なっかしいものもつくり出されてくる。これをどういうふうにしたらいいのだろうか。つまり「宗教」と「科学」の関係です。どうも「精神革命」はその後に起こった「科学革命」との関係をどのようなものとするのかという問題を十分に解決せずに、置き残して今日に至っているように思うのです。当初は「科学」と「宗教」の闘争といわれるものが生じ、その後は相互の無関心と分離という現象が起こっているようにも見えます。しかしすでに述べたように、十七世紀「科学革命」以来の自然観・世界観が今や大きく転換しつつあると思われるとき、この新しい自然観・世界観の下にこの両者の調和ある統合があらためて樹立されなければならないでしょう。そのとき宗教は科学に隷属するものではなく、科学技術が地球と人間の安全と向上のため発展していくような方途を指し示す役割を果たさなければならぬと思います。つまり「科学倫理」(ethics of science)——「生命倫理」「情報倫理」などはその一部です——の確立に寄与しなければなりません。このことが課せられています。

また「精神革命」の四つの伝統の下で、普遍宗教となったキリスト教、イスラム教、仏教、儒教の他に、民俗宗教として存在しているヒンズー教、道教、神道なども、人間と自然との関係において、今日重要な意味を持っています。こうしたものをも含めて、自然観、世界観、宗教観の大きな見直しを、二十一世紀における地球社会の存続のために、今求められています。